

# 国道バイパス建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報

平成11年度

北 内 遺 跡

池 下 遺 跡

満濃バイパス予備調査

小 塚 遺 跡

平 成 12 年 3 月

香川県埋蔵文化財研究会

## 例　言

1. 本書は、国道バイパス建設に伴い、平成11年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の概要を記録したものである。
2. 本調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。
3. 本年度の調査組織は、以下のとおりである。

総括	所長	菅原 良弘
	次長	川原 裕章
総務	副主幹（兼）係長	六車 正憲
	副主幹（兼）係長	田中 秀文
	主任主事	細川 信哉
調査	参事	長尾 重盛
	主任文化財専門員	藤好 史郎
池下・北内遺跡		
	文化財専門員	島田 英夫
	文化財専門員	佐々木正之
	調査技術員	東条 貴美
満濃バイパス予備調査		
小塚遺跡		
	主任技師	野崎 隆亨
	技師	松本 和彦
	調査技術員	豊岡 多恵

4. 本書の執筆は、第1章については藤好が、第2章についてはそれぞれ担当者が行い、日次にその文責を記している。また、本書の編集は松本が行った。
5. 調査にあたっては、次の機関の協力と各位の御指示を得た。記して謝意を表したい（順不同敬称略）。  
建設省四国地方建設局香川工事事務所、地元各自治体、地元各水利組合、渡部明夫
6. 本書で用いている方位の北は国土座標IV系の北である。
7. 挿図の一部に、国土地理院地形図（1/25,000）を使用した。

## 本 文 目 次

第1章 平成11年度調査の経緯と概要.....	(藤好)	1
第2章 調査の概要.....		2
I), 北内遺跡		
1, 遺跡の立地と環境.....	(佐々木)	2
2, 調査成果の概要.....	(島田・佐々木)	3~6
II), 池下遺跡		
1, 遺跡の立地と環境.....	(佐々木)	7
2, 調査成果の概要.....	(島田・佐々木・東条)	7~13
3, まとめ.....	(島田)	14
III), 満濃バイパス予備調査		
1, 対象地の立地と環境.....	(増井)	15
2, 調査成果の概要.....	(松本)	15~18
3, まとめ.....	(松本)	16
IV), 小塚遺跡		
1, 遺跡の立地と環境.....	(野崎)	19~20
2, 調査成果の概要.....	(松本)	20~26
3, まとめ.....	(松本)	27~28

## 挿図目次

- |  |  |
|--|--|
| 第1図 遺跡位置図及び周辺の遺跡(S=1/25,000)                       | 第13図 対象地全体図(S=1/4,000)                   |
| 第2図 北内遺跡遺構配置図(S=1/500)                             | 第14図 出土遺物(S=1/4)                         |
| 第3図 北内遺跡V区S R01断面図(S=1/40)                         | 第15図 遺跡位置図及び周辺の遺跡(S=1/25,000)            |
| 第4図 調査区割図及び土層柱状図(S=1/2,000)                        | 第16図 S D01断面図(S=1/20)                    |
| 第5図 池下遺跡遺構配置図(S=1/500)                             | 第17図 S D02断面図(S=1/40)                    |
| 第6図 I区S R01断面図(S=1/60)                             | 第18図 S D03・04位置関係(S=1/400)               |
| 第7図 II区S D01・S D05断面図(S=1/40)                      | 第19図 S D03断面図(S=1/40)                    |
| 第8図 II区S D11断面図                                    | 第20図 小塚遺跡遺構配置図(S=1/100)                  |
| 第9図 II区S E01平・断面図(S=1/30)                          | 第21図 S B01平・断面図(S=1/80)                  |
| 第10図 III区S T01・S T02平・断面図(S=1/20)<br>及び出土遺物(S=1/3) | 第22図 S R01断面図(S=1/40)                    |
| 第11図 IV区S E01平・断面図(S=1/40)                         | 第23図 丸龜平野条理型地割地下遺構分布図<br>(森下文献より抜粋、一部加筆) |
| 第12図 対象地位置図及び周辺の遺跡(S=1/25,000)                     |  |

## 写真目次

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| 写真1 北内V区S R01(北より)                          | 写真14 北内V区全景(西より)         |
| 写真2 I区S R01(北より)                            | 写真15 池下III区全景(西より)       |
| 写真3 S R01中層出土繩文土器片                          | 写真16 A地区堅穴住居検出状況(西より)    |
| 写真4 S R01下層出土縄文時代片                          | 写真17 A地区遺構検出状況(東より)      |
| 写真5 II区全景(東より)<br>(手前はS D11, 奥はS D01・S D05) | 写真18 D地区調査風景(北より)        |
| 写真6 II区S D05(北より)                           | 写真19 E地区調査前全景(南東より)      |
| 写真7 II区S D11(北より)                           | 写真20 E地区自然河川断面(南より)      |
| 写真8 II区S E01(南より)                           | 写真21 調査区空中写真(南より)        |
| 写真9 III区S B01全景(西より)                        | 写真22 S D01全景(北西より)       |
| 写真10 III区S T01検出状況(南より)                     | 写真23 S D01完掘全景(南東より)     |
| 写真11 III区S T02検出状況(南より)                     | 写真24 S D01遺物出土状況(南より)    |
| 写真12 IV区S B01全景(北より)                        | 写真25 S D01遺物出土状況(南東より)   |
| 写真13 IV区S E01全景(南より)                        | 写真26 S D02・03・04全景(北西より) |
|   | 写真27 S B01他完掘全景(北より)     |

## 第1章 平成11年度調査の経緯と概要

平成11年度の建設省施工国道関係の埋蔵文化財の発掘調査は、香川県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとの間で平成11年4月1日付けで締結した「埋蔵文化財調査契約」に基づき実施した。発掘調査としては国道32号関係では綾歌バイパスの綾歌町池下遺跡・北内遺跡の発掘調査と満濃バイパスの満濃町羽間地区・綾歌町室塚地区の予備調査があり、国道11号関係では坂出丸亀バイパスの多度津町小塚遺跡の発掘調査を実施した。

綾歌バイパスの池下・北内遺跡は綾歌町栗熊東に所在し、調査対象面積は、5,125m<sup>2</sup>で、4月～12月にかけての9ヶ月間で調査を実施した。北内遺跡については平成10年度の調査地の西側に位置し、池下遺跡とは東大東川を挟んで東に位置する。平成10年度の北内遺跡の発掘調査では、地形的にやや高い西よりの調査区で中世の掘立柱建物および弥生時代前期から中期にかけての土坑墓等を検出している。北内遺跡の中心はより南の地形的に安定した箇所が候補としてあげられようが、今年度の調査区では東大東川に隣接することもあり、縄文時代後晩期～弥生時代にかけての自然流路を検出した。また東大東川の西に位置する池下遺跡では、琴平電鉄栗駒駅の東までが調査対象となったが、西に向かってわずかに下る地形を呈しており、東部の東大東川に隣接する調査区では北内遺跡同様縄文時代後晩期の自然流路と弥生時代後期から古墳時代前期の溝・井戸を検出した。また全域で中世の集落跡を検出しているが、東部では近世以降の集落と重複しており、以降の残存状況は良好ではない。中世にかけての集落域は池下遺跡調査対象地中央やや西よりも中心となるようである。掘立柱建物だけではなく、土坑墓も、確實なもので2基検出している。いずれも鶴足郡条里地割方位に規制された南北に主軸をもち、屋敷に隣接して設けられた墓である。なお出土人骨については香川医科大学医学部医学科法医学井尻巖教授・木下博之助手に鑑定を依頼している。調査対象地の西で、1ヵ所確認を行ったが遺構は検出されず西の佐古川・窪田遺跡が立地する低平な微高地までの間の低地に集落の痕跡は認められない。

満濃バイパスの予備調査は、平成11年6月に実施した。実掘面積は417m<sup>2</sup>である。対象地は満濃町から綾歌町にまたがり、西の満濃町羽間地区では、北に下る緩斜面上で弥生時代後期の集落跡を確認した。また東の綾歌町室塚地区では丘陵上と東端の緩斜面上でいずれも弥生時代の遺構を確認している。対象地東端の室塚地区では、バイパス建設予定地内を香川用水の隧道が走っており、予備調査実施に当たっては水資源開発公団香川用水管理所と事前に協議を行った上で重機による機械掘削を行った。

国道11号坂出・丸亀バイパス関係で多度津町小塚遺跡の発掘調査を平成11年4月・5月で実施した。調査面積は820m<sup>2</sup>である。調査では、弥生時代後期の多量に土器が廃棄された溝と平安時代前期に遡る可能性のある南北の道路上遺構を検出している。側溝に挟まれた上面幅が約6mを測る規模の大きなものであることに加え、調査対象地が多度郡条里2条と1条の条界に位置することから、南北をつなぐ幹道の可能性も考えられる。

## 第2章 調査の概要

### I) 北内・池下遺跡

はじめに

国道32号綾歌バイパス建設に伴い、平成10年7月に予備調査を実施し、池下遺跡の本調査を平成11年4月～12月まで行った。調査面積は5,125m<sup>2</sup>である。併せて、平成10年度の調査に続く北内遺跡の調査も行った。調査面積は1,202m<sup>2</sup>である。

#### 1. 北内遺跡

##### (1) 立地と環境

北内遺跡は、香川県綾歌郡綾歌町栗熊東1557-2番地外に所在する。当遺跡は南から北に向かって下る緩斜面上にあり、標高37mを測る。東の旧馬指川と西の東大東川によって挟まれた微高地上に立地している。

周辺の遺跡としては、北内遺跡のすぐ南に栗熊遺跡（北内遺跡と同一微高地上）があり、弥生土器と思われる遺物が多量に出土したと伝えられているとともに、古代末～中世初頭の遺構・遺物が確認されている。また、北内遺跡の北東には、鶯ノ山廃の石棺3基を持つ、古墳時代前半葉造の快天山古墳がある。さらに、遺跡の周辺には条里地割の名残と考えられる道路や水路が残っている。

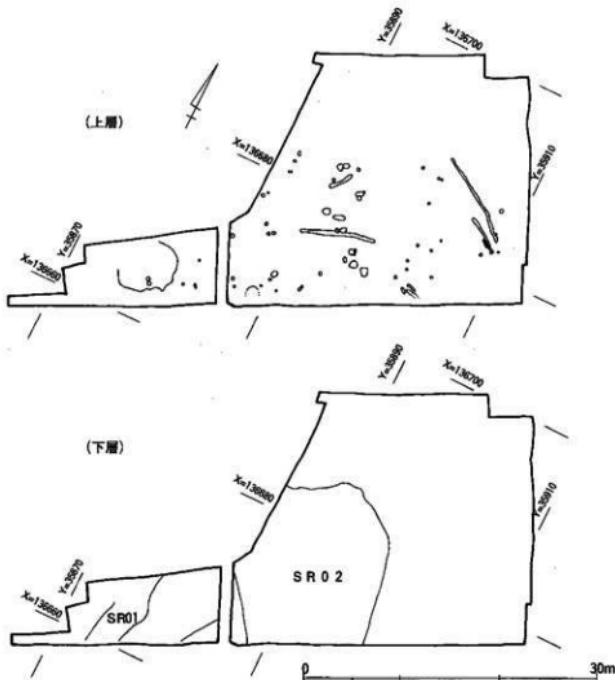


第1図 遺跡位置図及び周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

## (2) 調査の概要

調査は平成10年度に行った北内遺跡Ⅰ～Ⅳ区の西側に位置するV区について行った。東大東川の東岸部分にあたり、調査区中央部は、大型の倉庫として使われていたので、建物の基礎等で上面は削平を受けている部分が見られた。

基本層序として、黄色粘土からなる基盤層が、調査区東では、耕作土、床土を経て遺構面となり、中世と弥生の遺構が併存する。V区中ほどでは、耕作土、床土を経て、地表下0.2mで暗灰色細砂からなる縄文包含層の上面にて中世と弥生の遺構が併存する。0.2mの深さを持つ縄文包含層の下には橙灰色粗砂からなる東大東川旧流路跡が検出できる。基盤層は、調査区東側から東大東川に向かって下がっていく。調査区西よりでは、耕作土直下、灰褐色砂泥シルトからなる弥生包含層上面に中世の遺構が存在する。さらに、地表下0.4mで暗褐色細～粗砂からなる弥生の遺物を伴う自然流路を検出している。この辺りでは地表下1.3mで黄色粘土の基盤層が確認できた。



第2図 北内遺跡遺構配置図 (S = 1/500)

### (3) 遺構・遺物の概要

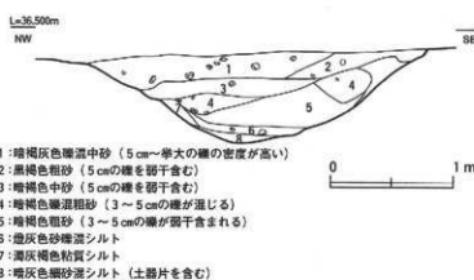
調査区西端部で自然流路を検出したほか、同一面で中世及び近世の遺構を検出した。柱穴の多くが近現代の攪乱であるが、調査区中央で弥生時代前期頃の土器細片を多量に含む土器溜まりを検出した。調査区中央では、流路上の不規則な落ち込みの中から縄文時代の土器片が出土している。

#### S R01

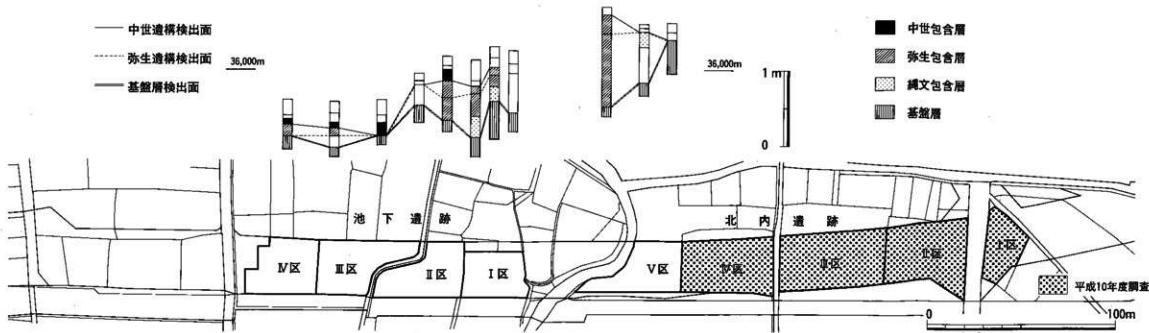
調査区の西側を流れる東大東川にはほぼ平行して検出した、北東方向に延びる自然流路である。流路の北端は東大東川の護岸工事により消失しており、これより北側の流路の方向を確認することはできなかった。上面幅3.0m、深さ0.7mを測り、長さ8.0mにわたって検出した。埋土は3層に大別でき、上層と中層にはそれぞれ暗褐色粗砂がラミナ状に見られる。下層には橙灰色と暗灰色の砂混シルトが薄く堆積している。下層からは弥生時代後期の壺が出土している。



写真1 V区 S R01 (北より)

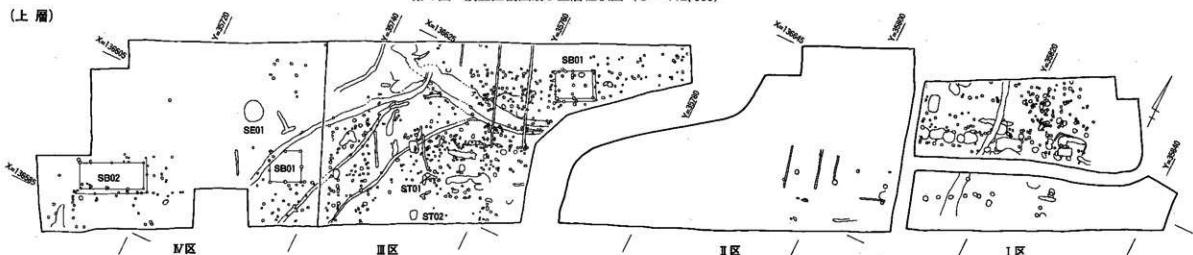


第3図 V区 S R01断面図 (S = 1/40)

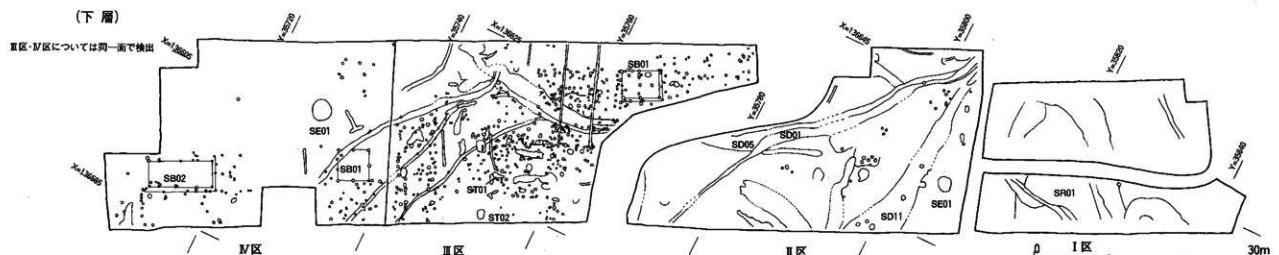


第4図 調査区画図及び土層柱状図 ( $S = 1/2,000$ )

(上層)



(下層)



第5図 池下遺跡構造配置図 ( $S = 1/500$ )

## Ⅱ) 池下遺跡

### (1) 立地と環境

池下遺跡は、香川県綾歌郡綾歌町栗熊東477-1番地外に所在する。平成10年7月に香川県埋蔵文化財調査センターが行った予備調査の成果をふまえて、平成11年4月から本調査に着手した。対象地は、佐古川・窪田遺跡から東に下った広く浅い谷部を間に挟んで、東大東川に向かって緩やかに上がる微高地土上に立地している。微高地頂上部の標高は37mを測る。

周辺の遺跡としては、縄文時代までのものはあまり知られていない。弥生時代では、次見遺跡、行木遺跡、行末西遺跡と前期の遺跡が知られている。当遺跡の西方、中大東川上流の東岸に位置する佐古川・窪田遺跡では、平成9年度の調査で弥生時代前期後葉～中世前半までの各時期の遺構を確認している。代表的な遺構として、古墳時代後期の庵を持つ豊穴住居、中世前半の掘立柱建物があげられる。条里地割については、北内遺跡と同様である。

### (2) 調査の概要

調査は、調査区を東からI～IV区に分割して行った。

調査対象地の地目はI・II区が宅地、III・IV区は水田である。I区中より西の基本層序は耕作土・床土を経て、地表下0.3mで中世の第1遺構面に至る。さらに弥生包含層となる褐黃灰色ないし黒褐灰色砂混粘質シルトを0.1m下げ、暗灰褐色砂混シルトないし青灰色砂質シルトの上面で弥生の第2遺構面が存在する。さらに、縄文包含層となる黃灰色細砂混粘質シルトの落ち込みの第3遺構面を検出する。I区東よりでは、耕作土・床土を経て、東大東川を原因とした氾濫の痕跡である洪水砂を検出した。II区の基本層序は、東よりでは、耕作土・床土、暗灰褐色細砂質土の中世包含層を経て、地表下0.3mで灰褐色細砂混シルトからなる弥生包含層の上面で中世の第1遺構面に至る。さらに、弥生前期と後期の面が間層を挟んで存在する。II区西よりでは、耕作土・床土を経て、地表下0.2mで中世と弥生の遺構を同一面で確認した。遺構面は暗褐灰色砂礫層上にあり西端に近づくと砂礫の代わりに基盤層である黄色粘土上に遺構が存在する。ここまで、東から西に向かって、地表面・中世・弥生遺構面ともに緩やかに下っている。III区の基本層序は耕作土・床土・灰褐色砂質土の中世包含層を経て、地表下0.5mの基盤層（黄色粘土）上面で中世と弥生の遺構が同一面で存在する。III区西からIV区にかけての基本層序は、III区東から続く暗褐灰色砂混シルトないし灰色砂質土からなる中世包含層を経て、褐灰色砂混シルトないし灰褐色砂質土からなる弥生包含層を約0.1m下げたところにある灰色粗砂ないし基盤層である黄色粘土上に弥生の遺構面が存在する。

### (3) 遺構・遺物の概要

I区第1遺構面では、ほとんどの遺構が近世以降と考えられる。主に柱穴・土坑・掘乱を検出した。第2遺構面からは、弥生土器片・サヌカイト片を含む溝状遺構を1条検出した。第3遺構面では、縄文後期土器を含む自然流路跡を検出した。II区第1遺構面では、中世の遺物を含む溝状遺構・すき溝痕・柱穴を検出した。第2遺構面からは、弥生～古代の土器片を伴う柱穴、弥生時代後期～中世初頭にかけての溝状遺構を5条、弥生後期末～古墳時代前期の遺物を作う土坑及び井戸跡を検出した。III・IV区では、同一面で鎌倉時代前葉～中葉にかけての遺構と弥生の遺構を検出した。主な遺構としては、中世～近世の掘立柱建物3棟、弥生土器片・石鐵を作う弥生時代の溝状遺構6条、中世の井戸跡1基を検出し

た。Ⅲ区には土師器片を伴う中世の柱穴が集中しており、集落域と思われる。柱穴群の南側からは、人骨・遺物を伴う13世紀初めの土坑墓が2基検出されている。

## I区

### S R01

調査区西側で検出した、不定形な、蛇行した流路の痕跡をS R01と命名した。幅は流路南端部で11.5m、北端部で8.7mと、南側が広く、北へ向かって先細りとなる舌状の平面形を呈する。流路の断面形は、中央よりやや西に幅4.4mの落ち込みを持ち、途中にテラスを持つ。落ち込みの深さは約0.7mであり、テラス部分の深さは、0.3~0.5mである。埋土の主なものとして、上層が暗褐色及び黄灰褐色砂混シルト、中層が灰黄色及び青灰色細砂混シルト下層として中層より多く砂を含む青灰色砂混シルトが挙げられる。縄文時代後期の土器片を含む包含層からなっており、上層が他の2層より遺物量が多かった。流路方向については不明瞭である。主な遺物としては、縄文時代後期初頭の深鉢や浅鉢が多数出土しており、各層ごとに遺物を取り上げた。

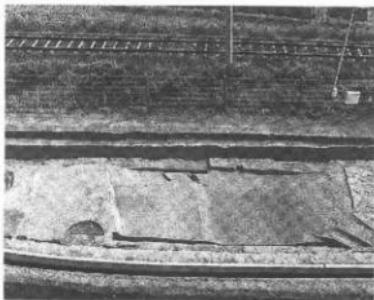
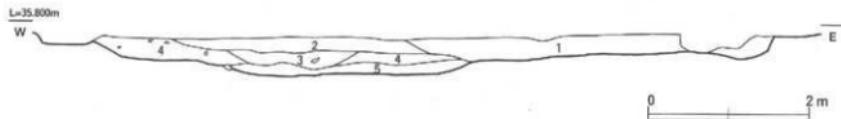


写真2 I区 S R01 (北より)



1:黄色シルト 2:黄灰色砂混シルト 3:暗褐色砂混粘質シルト 4:黄灰褐色砂混粘質シルト 5:灰黄色粘質シルト

第6図 I区 S R01断面図 ( $S = 1/60$ )

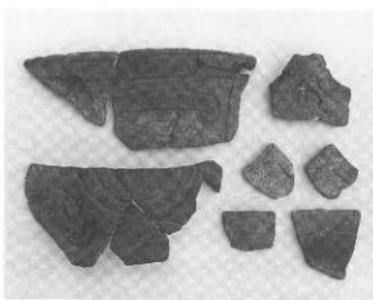


写真3 I区 S R01中層出土縄文土器片



写真4 I区 S R01下層出土縄文土器片

## II区

### S D01

調査区の南西から北東に向けて緩やかに蛇行しながら流れしており、幅2.3m、深さ0.4mを測り、長さ1.0mにわたって検出した。この溝は、等高線には平行する形で検出しており、溝の南北の高低差も0.7mであり、流れが緩やかであったと思われる。埋土は3層に大別することができ、上層から下層にかけて暗灰褐色砂混粘質土・黒褐色細砂混粘質土・黒灰褐色細砂混粘質土が堆積している。主な遺物としては、弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての土器片が出土している。さらにⅢ区においてもこの溝に平行する溝状遺構を4条検出している。

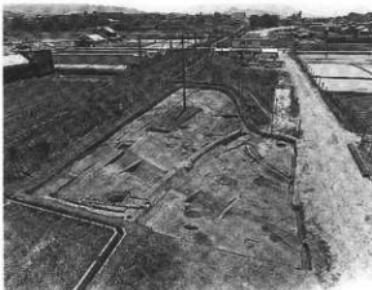


写真5 II区全景(東より)  
(手前はSD11, 奥はSD01・SD05)



第7図 II区 SD01・SD05断面図 (S=1/40)

### S D05

調査区北側でSD01に切られる形で検出した幅2.5m、深さ0.6mを測る溝である。溝の底が東端より西端の方が0.5m低くなっている。この溝に関しては北東から西方向に流れている。埋土は3層に大別することができ、上層から下層にかけて暗灰褐色細砂混シルト・褐灰色細砂質土・灰褐色シルト混細砂が堆積している。主な遺物としては弥生時代後期後半～古墳時代初頭にかけての上器片が多量に出土した。Ⅲ区部分では延長部分と考えられる溝を検出した。その方向はSD05から北西に向けて延びる。



写真6 II区 SD05 (北より)

### S D11

調査区東側で、幅3.3m、深さ0.6mを測り、長さ24.0mにわたって検出した。断面形は浅いU字状を呈し、南から北へ直線的に流れる。主軸方位はN 5° Eにとる。SD11の埋土は、上層が褐灰色シルト、中層が灰褐色中砂質土、下層が灰色細砂質土である。主な遺物としては、弥生時代中期初頭のものが出土しており、櫛描紋をもつ壺や壺、サヌカイト製のスクレイパー等がある。

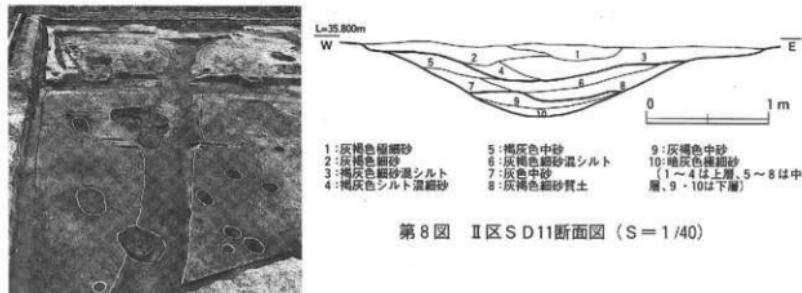


写真7 II区SD11（北より）

#### S E01

調査区東端で検出したほぼ方形の井戸跡である。規模は長軸2.0m、短軸1.8m、深さ0.8mである。断面は大別して、4層に区分でき、底部がほぼ平原な皿状を呈する。上層の埋土は砂質土からなり中層の埋土は黒色粘土と暗褐色粘質シルト、下層の埋土は黒褐色粘土である。最下層は灰色粗砂と粘性の緩い黒灰色粘土からなり、拳大の石が四方に敷かれているのが特徴的である。主な遺物としては古墳時代前期の土器が出上している。中層からは、薄手で精良な作りである布留式の壺が出上しており下層からは同じく布留式の鉢が出上している。

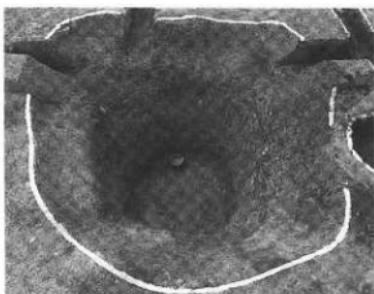


写真8 II区SE01（南より）

第9図 II区SE01平・断面図 (S=1/30)

### III区

#### S B01

調査区東端部で検出した掘立柱建物である。梁間2間（3.4m）、桁行2間（4.6m）、面積15.6m<sup>2</sup>を測り主軸方位をN32°Wにとる。柱穴の平面形は不整円形、断面形はU字状を呈し、径0.2~0.5m、深さ0.2~0.4mを測る。埋土は灰褐色系砂混シルトである。一部の柱穴には柱材が遺存していた。柱穴からの出土遺物は土師器小皿であり、12世紀頃の所産であると思われる。S B01の南側と北側には、それぞれの柱穴列と平行する形で軒の可能性が考えられる柱穴列を検出している。

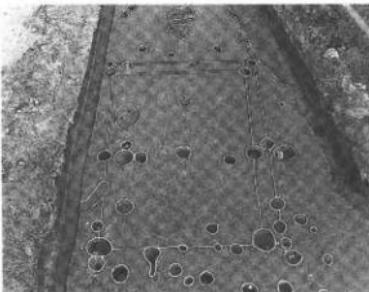


写真9 III区S B01全景（西より）

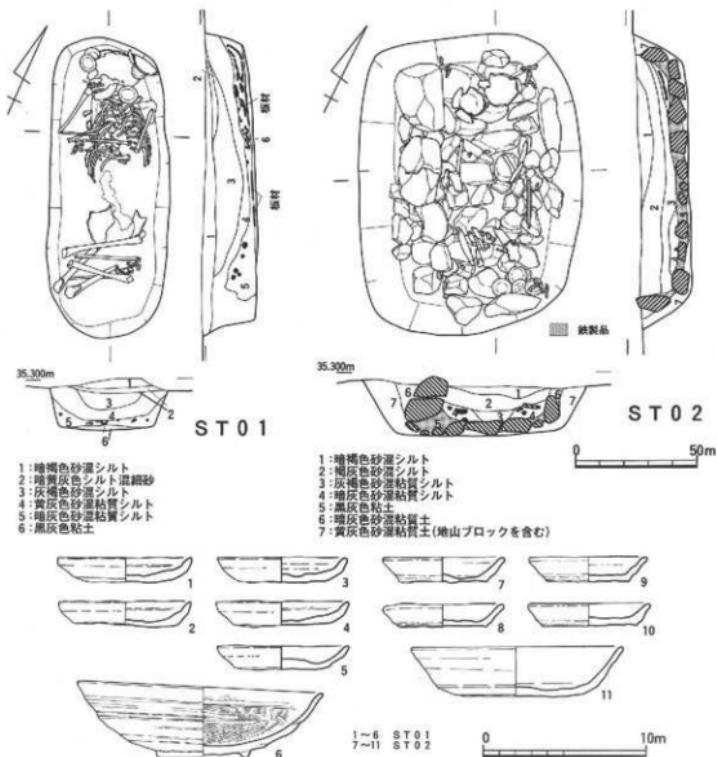
III区中央南寄りで2基の中世土壙墓を検出した。2基共に主軸方位を南北方向に持ち、丸龜平野東部（鶴足郡）に現存する条里型地割と方位をほぼ同じくする。調査区内は北部と西部に柱穴群が集中し、土壙墓の周囲には遺構が希薄である。更に、S T01以南では遺構の検出をほとんどみないことから、居住域と墓域を逸していたことがうかがえる。

#### S T01

III区中央やや南寄りで検出した土壙墓である。平面形は細長い梢円形を呈し、長軸1.2m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る。削平を受けているため本来の深さは不明である。内部からは1体分の人骨と歯を検出した。上圧により、関節や肋骨、指の骨等の小さな骨の破損はみられるものの、ほぼ全身を確認できる良好な状態で出土した。埋葬姿勢は北頭位で、頭部と下肢部を西向きにした屈葬である。端片の腐食が激しく形や構造の想定は難しいが、人骨胸部付近の上位と下位に板材を検出した。副葬品は、頭骨付近で12世紀末~13世紀初頭のものと思われる完形の土師質土器皿5点と須恵器椀1点、銭貨1点を検出した。また、胸部付近で同安窯系青磁皿I類の底部と口縁部の破片が2個体分2点出土した。

#### S T02

III区中央南部で検出した木棺墓である。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。S T01と同じく削平を受けており本来の深さは不明である。棺の板材を確認することはできなかったが、土壙4隅と側壁部中央に計16点の鉄製釘を検出したことより、長さ0.9m、幅0.5mの箱形木棺が想定できる。土壙底部に拳大の川原石を敷き詰め、周囲には人頭大・方柱状の安山岩を配石している。木棺想定範囲の内部からは人骨を1体分検出した。出土人骨は土壙化が激しく、一部のみの確認となった。頭骨は北寄り、半ば土壙化した大腿骨は南寄り、顎骨と思われる筒状の骨を南部西寄りに検出した。また、頭骨の西寄りで歯を2本検出したことから、北頭位西向きの屈葬であると考えられる。副葬品は、頭骨付近で完形の土師器杯1点と足下に13世紀初頭のものと思われる土師質土器皿4点を検出した。また、土壙内中央東寄りに、人骨と平行し、刃先が南に向いた状態で長さ19.5cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmの周囲に木質を伴う鉄製刀子が出土した。



第10図 III区 S T01・S T02平・断面図 (S = 1/20) 及び出土遺物 (S = 1/3)

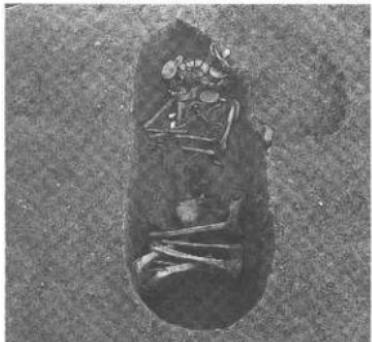


写真10 III区 S T01検出状況 (南より)



写真11 III区 S T02検出状況 (南より)

#### IV区

##### S B01

調査区の東部で検出した正方形の掘立柱建物である。西辺は不明瞭であるが、概ね梁間2間(4.0m)桁行2間(4.0m)を測る。条里地割の規制を受けたと見られ、当時の名残と思われる道路や水路と方向がほぼ一致する。柱穴の平面形はほぼ円形、断面形はU字状を呈し、径0.1~0.3m、深さ0.3~0.7mを測る。一部の柱穴には柱痕・柱材・根石が遺存していた。柱穴からの出土遺物は土師器小皿・土鍋片・須恵器片があり、12世紀頃の所産と思われる。

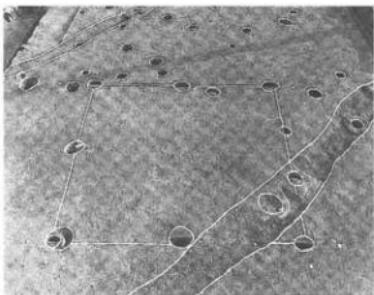


写真12 IV区 S B01全景（北より）

##### S E01

調査区の中央より北東部で検出した井戸跡である。上面の平面形はほぼ円形であるが、段落ち部の平面の平面形は方形を呈する。規模は南北2.8m、東西2.7m、深さ0.8mである。

井戸枠や支柱の痕跡がないことや碗状のくぼみをもつことは通常の井戸とは異なるが、底が砂礫層まで達しており、出水状の人為的施設と考えられる。埋土はラミナ状に堆積しており、3層に分かれる。下層には植物遺存体が多量に含まれている。出土遺物は土師器土器片・須恵器片・青磁細片等であり、12世紀頃の遺物が多く出土していることから、その頃まで機能していたと考えられる。

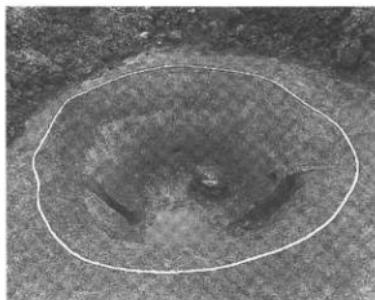
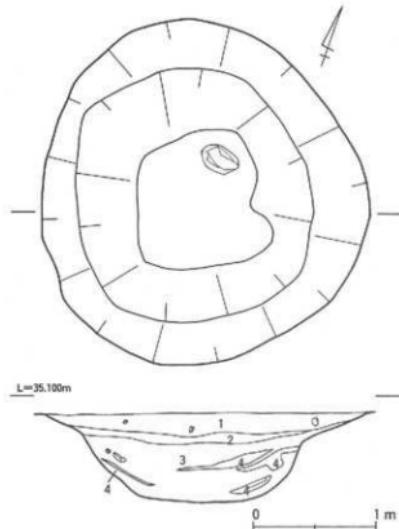


写真13 IV区 S E01全景（南より）



第11図 IV区 S E01平・断面図 (S = 1/40)

### 3. まとめ

北内V区の西半部～池下II区の東半部にかけて、広く東大東川を氾濫源とする洪水砂をベースとして各時代の遺構面が塗かれている。洪水砂のなかには縄文時代後期の土器を伴う包含層も存在している。また、弥生時代初頭～古墳時代初頭の遺物を伴う溝状遺構を数多く検出したが、現在の東大東川や地割の一部とも方向が一致しており、周辺の微高地形を原因として形成または人為的に作られたことが明らかとなった。

池下III区とIV区東端には柱穴が集中しており、そこに集落域があったと考えられる。掘立柱建物として検出できたのは3棟だけであるが、III区SB01の西側とIV区SB01の東側に、それぞれ規模の大きな建物や南北棟の存在がうかがえる。集落域南のはずれには、周辺の条里地割と方向を同じくする土坑墓が2基検出された。出土した人骨は、2月現在、香川医科大学医学部医学科法医学の井尻教授、木下助手に性別、年齢等の分析を依頼している。

池下IV区では柱穴の数が希薄になっており、水田であったと思われる。集落のはずれで検出した井戸跡は、より標高の低い場所に設けられていたことから飲料用というよりは灌漑用水として使用されていたものと思われる。

池下遺跡の西側で予備調査トレンチを入れたが、遺構等は検出できなかった。



写真14 北内V区全景（西より）



写真15 池下III区全景（西より）

### III) 満濃バイパス予備調査

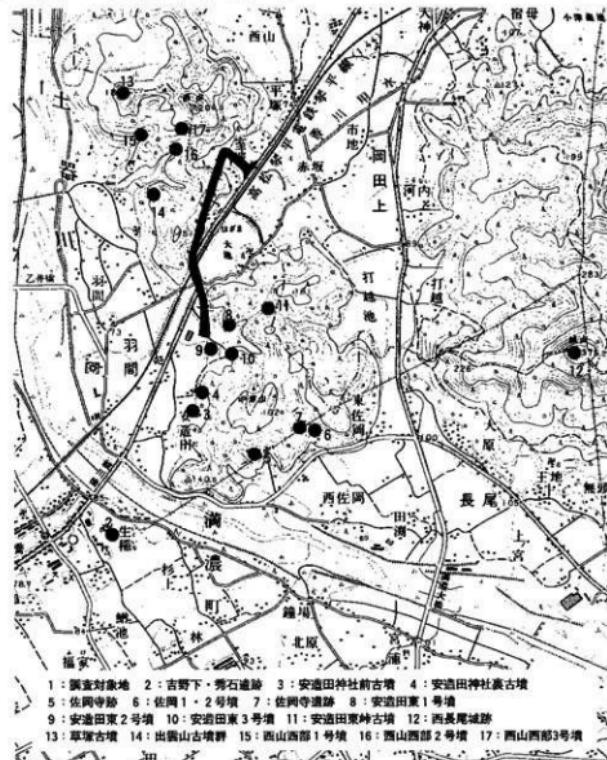
## 1. 対象地の立地と環境

対象地は満濃町から綾歌町にまたがり、中津山北裾部から緩斜面、西山丘陵（裾）部から緩斜面にかけて位置している。

周辺の遺跡として弥生時代では吉野下秀石遺跡（後期前葉）、賀田岡下遺跡（後期後半～古墳時代前期）の他、榎井遺跡がある。

古墳時代の遺跡としては、前期から中期にかけての古墳は少ないが、後期になると土器川左岸の羽間から長炭にかけての山麓や丘陵部に20基程度の古墳の存在が知られている。代表的なものとして、複室構造の安造田神社前古墳、一墳二石室で一方は複室構造である佐岡古墳、段の塚穴型と称される石室を有する断頭古墳、吉田神社前古墳、桜林清源寺古墳全国的にも珍しいモザイク玉が出土した安造田東3号墳などが知られている。この時期の集落は、吉野下秀右遺跡が知られている。

古代になると、満濃町四条本村に、弘安寺が建立されている。現在も本堂の下や境内隅に礎石が残り、白鳳期のものとみられる十六葉重弁蓮花紋軒丸瓦や重弧文軒平瓦が出土している。買田岡下遺跡ではやや下る平安時代前半期の大型建物群に伴って、瓦・綠釉陶器等が確認されている。



第12図 対象地位置図及び周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

## 2. 調査成果の概要

調査方法は対象地の踏査を実施し、丘陵裾部の緩斜面や尾根頂部を中心に埋蔵文化財が包蔵される可能性がある5箇所を設定し、幅1~2mのトレンチ調査を行った（実掘面積417m<sup>2</sup>）。

なお、E地区では対象地内を香川用水の隧道が横断しており、その管理者である水資源開発公団香川用水管理所と協議を重ね、掘削箇所や重機の進入路を決定した上で調査を実施した。

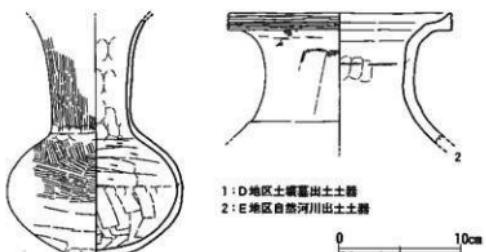
A地区 中津山北裾部に位置する緩斜面で、地目は水田である。旧地形に直交ないし平行する20本のトレンチ（計218m<sup>3</sup>）を設定した。現地表面から検出面（にぶい黄橙色粘質土）までの深度は0.4m前後、基盤層までの深度は1m前後を測る。弥生時代後期の竪穴住居・土坑・ピットを確認し、弥生土器の他、土師器・瓦器片も数点出土している。竪穴住居は径6m前後で、確認した限りでは隅丸方形の平面プランを呈し、検出面から床面までの深度は0.4mを測る。ピットは縦じて0.2m前後の深度を有する。

B地区 羽間池から西へ下る緩斜面に位置する。現地表面から2m近く掘り下げたが、耕作土下には黄色系砂質土と疊混じり粘質土の相互層が連続し、遺構・遺物は確認できなかった。

C地区 西山の南に位置する独立丘陵の東側緩斜面に位置する。地形に直交する約15m<sup>3</sup>のトレンチを設定した。腐植土下に基盤層である黄褐色粘質土が存在する。遺構・遺物は確認できなかった。

D地区 西山から東に派生する尾根頂部に位置し、頂部に約19m<sup>3</sup>のトレンチを設定した。標高は115mを測り、腐植土下に遺構検出面である明黄褐色混砂粘質土がみられる。遺構は1.0×0.7m、深度0.2mの梢円形の平面プランを有する土坑を1基検出し、弥生時代後期前葉の長頸壺が1点出土している。尾根頂部付近での検出や土器の出土状況から土壤墓である可能性が高い。

E地区 西山の裾部に位置し、東に下る緩斜面に位置する。22本のトレンチを設定した。西端部において弥生時代後期初頭前後の自然河川を1条確認した。対象地東側に位置する安定した微高地の縁辺部に位置しており、灌漑用水網の1つである可能性が高く、その規模から主水源を担うものであると想定できる。



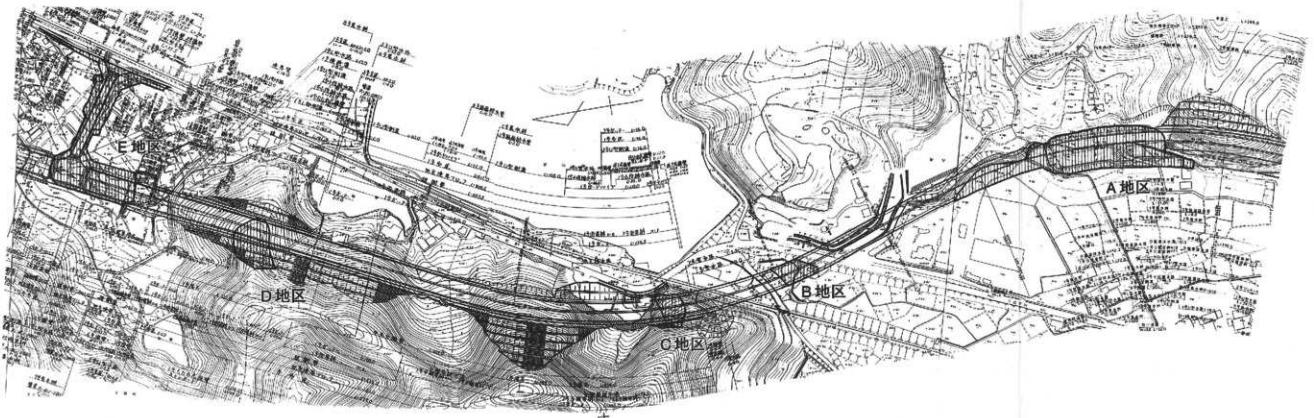
第14図 出土遺物 (S = 1/4)

### 3.まとめ

調査の結果、A地区では弥生時代後期中葉～後葉にかけての小規模な集落が展開していることが判明した。また、瓦器・土師器に混じり古墳時代後期の遺物の出土も少量ながら認められ、背後に位置する安造田古墳群との関係も指摘し得る。小字をとって「羽間遺跡」と称するのが妥当であろう。その面積は約3,750m<sup>2</sup>を測る。

D地区は1基のみの確認であるが、弥生時代後期前葉の土壤墓を検出した。周辺に展開していると想定できるため、尾根頂部全域を保護措置の必要な範囲と判断した(1,068m<sup>2</sup>)。

E地区では、弥生時代後期初頭の自然河川を含む範囲に関しては保護措置の必要な範囲とした。対象地外ではあるが、西側に位置する微高地に同時期の集落が展開すると予想でき、E地区との関連が注目できる。D・E地区は周辺の小字をとって、「室塚遺跡」遺跡と命名した。その面積は988m<sup>2</sup>を測り、D地区(1,068m<sup>2</sup>)を加えると2,056m<sup>2</sup>となる。



第13図 対象地全体図 ( $S = 1/4,000$ )



写真19 E地区調査前全景 (南東より)

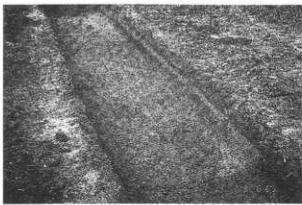


写真16 A地区堅穴住居検出状況 (西より)



写真17 A地区遺構検出状況 (東より)



写真18 D地区調査風景 (北より)



写真20 E地区自然河川断面 (南より)

#### IV) 小塚遺跡

## 1. 遺跡の立地と環境

小塚遺跡は、香川県仲多度郡多度津町葛原1977番地に所在する。丸龜平野のやや西部に位置し、南方には象頭山や大麻山を、西方には天霧山を望む。現地表面の標高は約14mを測る。

空中写真判読等によると、小塚遺跡周辺は金倉川から派生する幾条の河道が埋没していることが窺え、当遺跡はその窪地ないし低湿地を利用して作られたと考えられる中池の縁辺部に立地する。調査でも、その旧河道の痕跡を確認しており、上池から中池を経て千代池に向かう旧河道の存在を裏付けている。

また、丸亀平野は南から北へ緩やかに傾斜しているが、方格地割が良好に遺存している。その復元案によると、対象地東端部が概ね多度郡1条と2条の条界線に相当する。



第15図 遺跡位置図及び周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

周辺遺跡の状況であるが、四国横断自動車道建設に伴う発掘調査により遺跡数は大幅に増加している。以下、その発掘調査を中心に概観してみる。

旧石器時代の遺跡としては三条黒島遺跡で船底形石器や瀬戸内技法を取り入れた横長洞片が出土している。郡家田代遺跡ではナイフ型石器が出土している。

縄文時代では三条番の原遺跡で後期の石器製作跡が、龍川四条遺跡では晩期の凸帯文土器がそれぞれ出土している。また、永井遺跡では後期から晩期にかけて、平野部において営まれた集落が確認されている。

弥生時代では、ほぼ全時期を通じて営まれ、拠点集落に位置付けられる旧練兵場遺跡群が南方約3kmに所在する。この遺跡は流路により独立した複数の微高地にそれぞれ居住域が存在し、現時点では讃岐において最大規模の集落である。その他、前期を主体として一部中期まで存続する遺跡として、中ノ池遺跡や龍川五条遺跡、三井遺跡などが知られ、いずれも環濠を有する。中期の遺跡としては矢の塚遺跡・西碑殿遺跡・月信遺跡が丘陵裾に広がる遺跡がある。これらは幅1kmのなかで確認されており、関連し合って存続した遺跡群と評価されている。後期になると、40以上の堅穴住居を検出した先述の旧練兵場遺跡群や郡家田代遺跡や川西北七条遺跡などがある。

古墳時代になると、十数基の前方後円墳を含む400基以上が古墳が大麻山山麓を中心に確認されている。この地域で最古に位置づけられる大麻山中腹の標高405mに位置する野田院古墳をはじめ大麻山経塚古墳・丸山1号墳・大麻山椀貸塚古墳・大庭経塚古墳等が積石塚古墳として築造されている。近年、整備保存に伴う発掘調査が実施された野田院古墳では古墳築造過程を知る上で重要なデータを提供している。また、後期には九州系の横穴式石室を埋葬施設に持つ王墓山古墳（前方後円墳）や、線刻画が描かれた横穴式石室を持つ宮ガ尾古墳等が知られている。

古代に入ると、県内でも多数の寺院が建築されるが、当遺跡周辺では佐伯氏の氏寺と考えられている仲村庵寺や田村庵寺の古代寺院や善通寺などがある。また郡家原遺跡や郡家一里屋遺跡などで多数の獨立柱建物を検出している。

## 2. 調査成果の概要

調査面積は約820m<sup>2</sup>を測り、地目は一筆の水田である。基本層序は耕作土（床土含む）直下に遺構検出面である灰黄褐色粘質土ないし明黄褐色粘質土が存在する。現地表面から遺構検出面までの深度は約30cmを測り、対象地の南東から北西方向にごく緩やかに下っている。

調査では弥生時代終末ないし古墳時代初頭、古代のおおむね2時期の遺構・遺物を検出した。また、これ以外に近世の遺構が多く確認され、弥生時代終末ないし古墳時代初頭、古代に比して、その遺構密度は圧倒的に高い。

以下、時代別に主要遺構の概略を述べる。



写真21 調査区空中写真（南より）

### (1) 弥生時代終末ないし古墳時代初頭

当該期の遺構は2条の溝状遺構（S D01・02）を確認したのみであるが、埋土中から多量の土器が出土している。

なお、出土遺物の多寡に比して、居住遺構は全く検出できなかった。

S D01 調査区西端で検出した溝状遺構である。両側とも調査区外に延び、S R01と重複関係を有し、それに先行する。主軸方位は南東から北西方向を指向し、検出した限りではほぼ直線状を呈している。検出長約18.0m、検出最大幅約1.0m（平均幅約0.9m）を測る。断面形状はU字形ないしV字形を呈し、平均深度は約0.6mである。埋土は概ね3層に細分でき、下層に流水時の埋没土の可能性の高い褐色砂質土（第16図、土層注記番号3）、中層に黄灰色混砂粘質土(2)、上層に灰黄褐色混砂シルト質土(1)が堆積している。

なお、溝底面レベルにおける勾配は認められず、流下方向は不明であるが、南から北への流下方向が想定できる。

遺物は上・中層埋土を中心にも量に出土しており、28リットルコンテナで30箱を数える。そのうち下層からの出土は3箱弱である。

出土遺物は壺（広口壺・小型丸底壺・二重口縁端部壺）、甕、鉢（有孔深鉢）、高环等が出土している。各器種別割合の算定は行っていないが、壺・甕・鉢に比して、高环の出土量は極めて少ないことが窺える。

また、上層の出土状況をみると、口縁部を上方に向いた検出例が多く、埋置と言及することはできないが、それに近い行為が行われた可能性が残る。

出土遺物は布留式土器の影響を受ける前段階の所産で、大久保徹也氏の下川津IV式新段階に該当する（大久保1990）。古墳成立を言及することができないため、ここでは弥生時代終末ないし古墳時代初頭と考えた。



写真22 S D01全景（北西より）

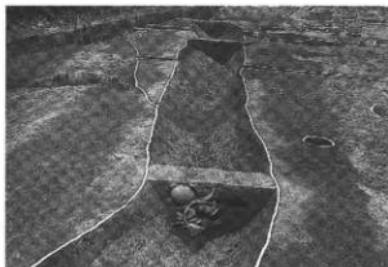
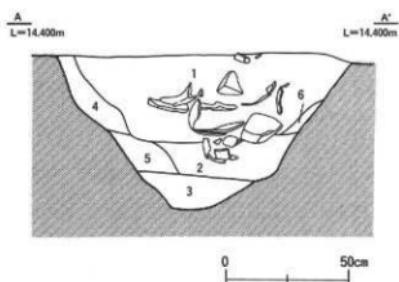


写真23 S D01完掘全景（南東より）



- 1:灰黄褐色 (10YR6/2) 混砂シルト質土, 上層
- 2:黄灰色 (2.5Y4/1) 混砂粘質土, 中層
- 3:褐灰色 (2.5Y5/1) 砂質土, 下層
- 4:黒褐色 (10YR3/2) 粘質土
- 5:にぶい黄褐色 (10YR5/4) 混砂粘質土

第16図 S D01断面図 (S = 1/20)



写真24 SD 01遺物出土状況（南より）

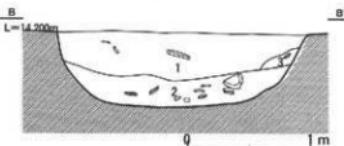


写真25 SD 01遺物出土状況（南東より）

SD 02 検査区中央やや東よりで検出した溝状遺構で、両側とも調査区外に延びる。主軸方位は概ね南北を指向し、検出した限りではほぼ直線状を呈している。検出長約35.5m、検出最大幅約 2.0m（平均幅約1.24m）を測る。断面形状は逆台形ないし船底状を呈する。平均深度は約 0.3 mで、溝底面レベルにおける勾配はみられない。埋土は下層に黒褐色混砂粘質土（第17図土層注記番号2）、上層に灰黃褐色混砂粘質土(1)がそれぞれ堆積し、下層埋土には若干量の砂質土が含まれる。

遺物は28リットルコンテナで5箱程度出土しており、壺・甕・鉢・高杯等がみられる。

出土遺物より上層は弥生時代終末ないし古墳時代初頭の埋没が想定できる。



- 1:灰黃褐色 (10YR5/2) 混砂粘質土、上層  
2:黒褐色 (10YR3/2) 混砂粘質土、下層、砂質度が高い  
3:にふい黄褐色 (10YR6/4) 混砂粘質土

第17図 SD 02断面図 (S = 1/40)

## (2) 古代

当該期の遺構は想定される多度郡1条と2条の条界線には沿った箇所で1条の溝状遺構を確認している（SD 03）。また、出土遺物は稀薄であるが、主軸方位や位置関係からSD 04・SB 01も当該期に属すると考えられる。

SD 03 調査区東端で検出した溝状遺構で、両端とも調査区外に延びる。検出長約37.5m、検出最大幅約2.0m（平均幅約1.8m）、南端での深度約0.5m、北端では約0.8mを測る。断面形状は中程に緩やかなテラス面を持つ箇所が大半であるが（逆凸字形）、南側付近では逆台形となる。主軸方位はN31° Wにとり、丸龜平野において広範に認められる方格地割に合致した方位で走行している。埋土は概ね3層に細別でき、下層に褐灰色砂質土（第19図土層注記番号3）中層に褐灰色混砂粘質



写真26 SD 02・03・04全景（北西より）

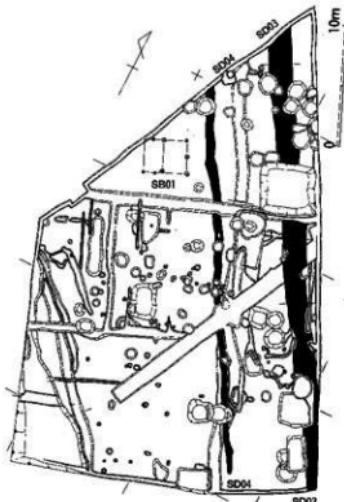
土(2), 上層ににぶい黄橙色混砂シルト質土(1)がそれぞれ堆積している。

出土遺物は稀薄で、S D02からの混入遺物を除くと、土師質土器・須恵器・小型綠釉椀等が小袋で5袋程度出土している。出土遺物のうち、小型綠釉椀は9世紀末~10世紀初頭に位置付けられ、下層の埋没は概ねその時期と想定できる。

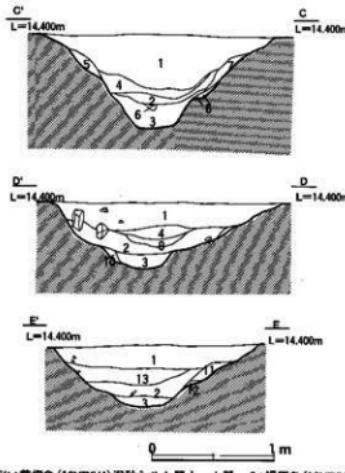
なお土層断面を仔細に観察すると、土層注記番号7・8・11・12が細分した3層の埋積前段階に埋没している可能性が想定できる。調査途上ではS D03が機能している段階での流入土的な埋没土であると想定したが、この埋土を積極的に評価するならば、1~3の埋土が再掘削後に埋没した埋土で、これらの埋土が先行して埋没した埋土の削り残りである可能性も考えられる。詳細な遺物の検討に加えて、周辺調査例の検討が今後の課題である。

S D04 調査区中央西より検出した溝状遺構である。前述したS D03に並走し、その幅は約5mを測る（主軸方位はN31°W）。検出長約33.5m、検出最大幅約0.8m（平均幅約0.6m）を測る。断面形状は皿状を呈し、平均深度は約0.1mを測る。埋土は下層に灰黄色混砂粘質土、上層に黄灰色混砂粘質土が堆積している。遺物はコンテナで1箱弱程出土しているが、大半は重複関係を有するS D02の埋土中より出土したもので詳細な時期を決定することは困難である。周辺遺構との位置関係からS D03と同時期の所産であると想定できる。

なお、遺構検出面の削平の度合いは不明であるが、中央南側で消失している。元来はS D03と併走した位置関係で延長していたと考えられる。



第18図 S D03・04位置関係 (S = 1/400)



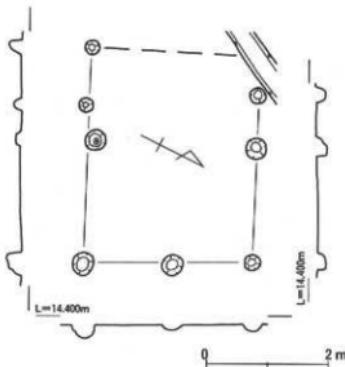
第19図 S D03断面図 (S = 1/40)

S B01 調査区中央北端で検出した掘建柱建物である。検出した限りでは、桁行2間×梁間1ないし2間、面積約10m<sup>2</sup>を測り、主軸方位はN65°Eにとる。柱穴平面形は円形で、掘方断面形状はU字形を呈する。柱痕跡や抜き取り痕は確認できない。

出土遺物が皆無であるため詳細な時期決定に問題が残すが、前述したS D03・04とS B01の主軸方位がほぼ直交しているため、概ね同時期の所産である可能性が高いと考えられる。



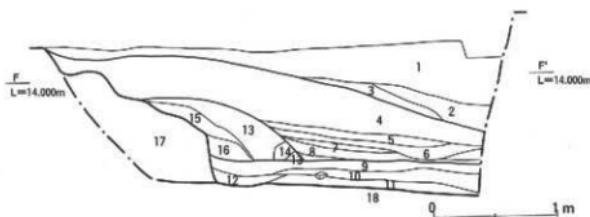
写真27 S B01他完掘全景（北より）



第21図 S B01平・断面図 (S = 1/80)

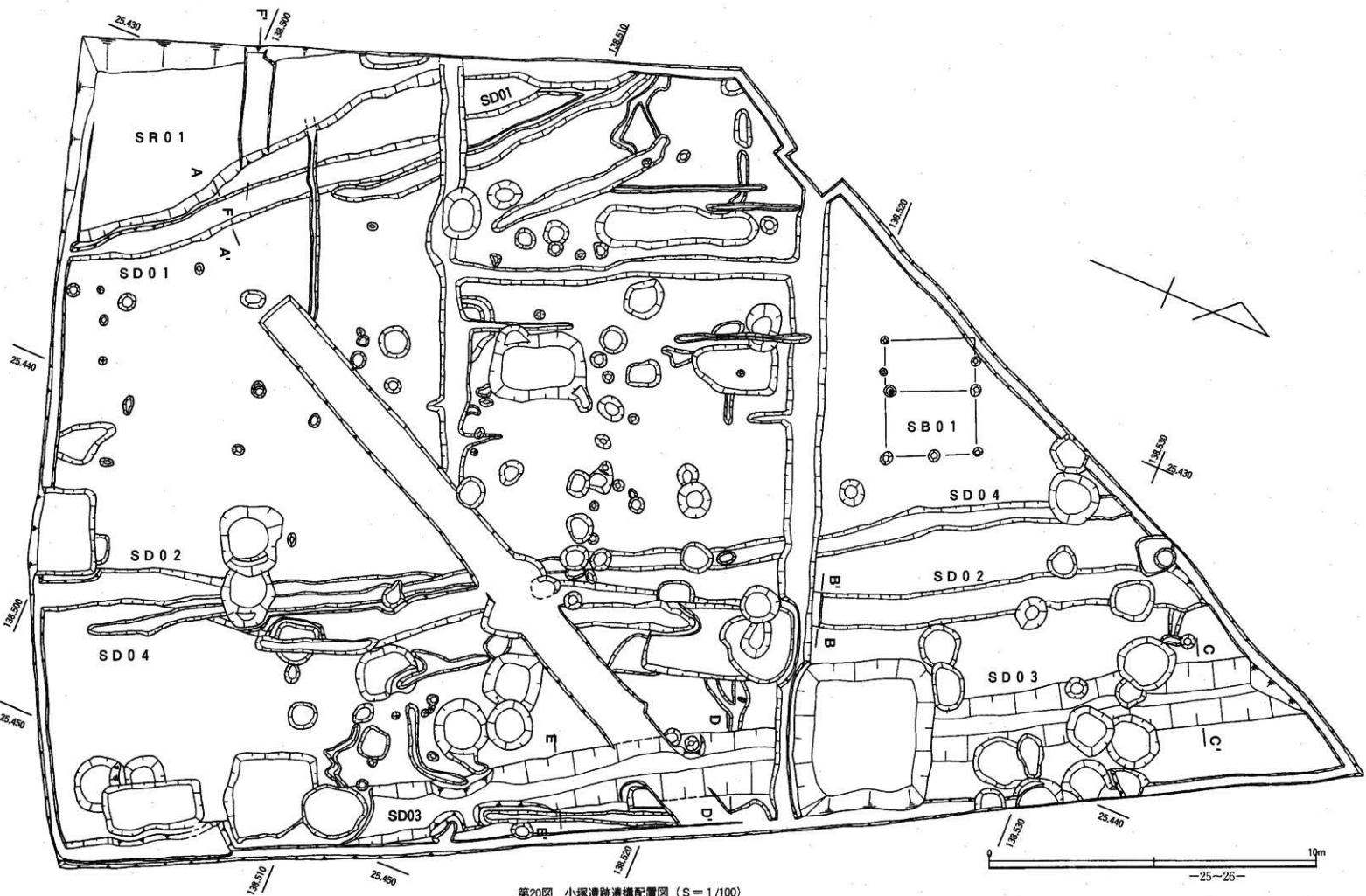
S R01 調査区南西隅で検出した旧河道で、東側肩の一部を検出している。検出最大幅は約6.0m、検出面からの深度は最深部で約1.25mを測る。埋土観察では、下層に流水段階の埋没土であるシルト質土と砂質土が薄く堆積し（第22図土層注記番号9～11）、その上面に東側肩部の崩落土が流れ込んでいる（13～16）。その後、2度目の流水段階埋没土である砂質土とシルト質土の相互層が認められ（5～8）、低湿地化が進行を示す黒色粘質土が堆積している（4）。埋没の最終段階は1～3層のシルト質土により急速に埋没したものと考えられる。なお、畦畔の検出に努めたが確認できなかった。

出土遺物は弥生土器（壺・甕）・土師器・須恵器（壺・高壺）等が確認できるが小袋で5袋と稀薄である。詳細な埋没時期は不詳であるが、上層の埋没は6世紀末前後と想定できる。



1: にびい黄橙色(10YR6/4)混砂シルト質土 2: にびい黄褐色(10YR5/4)混砂シルト質土 3: にびい黄褐色(10YR5/4)混砂シルト質土  
4: オリーブ黒色(5Y3/2)粘質土 5: 黄褐色(2.5Y5/4)シルト質土 6: 黄褐色(2.5Y5/1)砂質土 7: 黄褐色(2.5Y5/3)シルト質土  
8: 黄褐色(2.5Y5/3)砂質土 9: 黑褐色(2.5Y3/1)シルト質土 10: 橙灰色(10YR4/1)砂 11: 橙灰色(10YR5/1)砂質土 12: 灰色(5Y4/1)砂質土  
13: にびい黄褐色(10YR4/3)粘土 14: 黄褐色(10YR4/2)粘質土 15: 黑褐色(10YR3/2)粘土 16: 暗黄褐色(10YR4/2)粘土  
17: 明黄褐色(10YR6/6)粘土、地山 18: 砂礫層、地山

第22図 S R01断面図 (S = 1/40)



### 3.まとめ

9世紀末～10世紀初頭に属するであろう2条の溝状遺構（SD03・04）はその検出位置やそれぞれの位置関係が問題となり、ここで若干の検討を行う。SD03の検出位置は前述したように、多度郡1条と2条の推定界線に合致している。さらにSD03の西側に約5mの間隔を保って並走しているSD04は出土遺物から埋没時期を断定することはできないが、SD03と同時に機能した可能性が高い。上記の想定が正しいならば、SD03とSD04間の空白地を道路状遺構とみなすことができる。

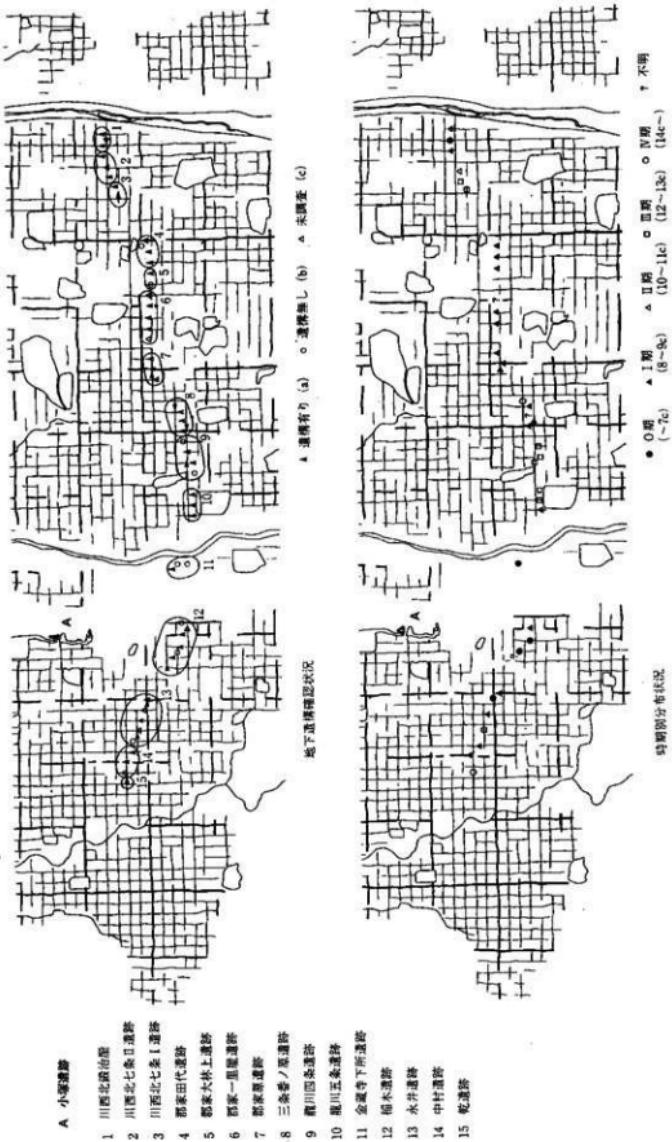
丸亀平野の条理型地割については、四国横断自動車道建設予定地（高松善通寺間）の調査報告書等が既に刊行され、詳細な検討が加えられている。第23図は森下氏により作成された丸亀平野条理型地割地下遺構分布図に当遺跡の位置及びその内容を加筆したものである（森下1997）。これによると、条界線を含む遺跡ではそれに沿った溝状遺構がほぼ全域で確認されている。このうち、小塙遺跡で検出した道路状遺構と類似した状況を示す遺跡が金蔵寺下所遺跡である。同遺跡SD06は那珂郡4条と5条の条界線に沿った位置で検出された溝状遺構である。周辺の方格地割に合致した方位であるN30°Wを指向し、幅0.8m・深度0.5mを測る。7世紀末～8世紀初頭の埋没が想定されている。この溝の西側には約4mの間隔を保った溝状遺構が並走している。この4m幅のなかに条界線に平行ないし直交する掘建柱建物が重複しているため、埋土・遺物の再検討が必要であるが、確認できる唯一の道路状遺構の可能性がある遺構である。並走する溝状遺構は確認できないが、削平による消失の可能性が残る遺跡も存在しており、遺構の在り方の再検討も必要であろう。

また、SD03下層は出土遺物から9世紀末～10世紀初頭の埋没が想定できる。しかし、溝さらえの可能性が残る埋土が一部確認できる。森下氏による分析では、丸亀平野の条理型地割の施工開始時期は7世紀末～8世紀初頭と想定されている（7世紀後半まで遡る可能性は残る）。SD03は地割の基準をなす坪界綫軸の条界線であり、この意味では掘削時期が遡る可能性は残り、再検討の余地がある。

今後周辺遺跡における地下遺構の状況や地割の詳細な検討を行い、SD03・04の性格や丸亀平野の条理型地割について言及することが務務と言える。また、SD01から出土したコンテナ30箱分の遺物は、弥生時代終末ないし古墳時代初頭の一括性の高い土器群であり、器種構成・他地域からの搬入土器等の検討を行う必要がある。

#### 〈参考文献〉

- |           |      |   |
|-----------|------|---|
| 大久保徹也     | 1990 | 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ下川津遺跡』香川県教育委員会他 |
| 藏本 晋司     | 1997 | 『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 空港跡地遺跡Ⅱ』香川県教育委員会他                         |
| 森下 英治     | 1997 | 「丸亀平野条理型地割の考古学的検討」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要V』 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター        |
| 香川県教育委員会他 | 1994 | 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第10冊 金蔵寺下所・西碑殿遺跡』                            |



第23図 丸亀平野条理型地割地下遺構分布図（森下文獻より抜粋、一部加筆）

ふりがな	こくどうばいばすけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはくつちようさがいほう							
書名	国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報							
副書名	北内遺跡 池下遺跡 満濃バイパス予備調査 小塚遺跡							
巻次	平成11年度							
編著者名	藤好史郎・島田英夫・佐々木正之・東条貴美・松本和彦・野崎隆亨・増井康弘							
編集機関	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL0877-48-2191							
発行機関	香川県教育委員会 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター 建設省四国地方建設局							
発行年月日	2000年3月31日							
総頁数 32p	日次等 4p	本文 28p	観察表 0枚	図版 0枚	挿図枚数 23枚	写真枚数 27枚		
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	北緯 °'." 遺跡番号	東經 °'." 1999.04.01 1999.12.31	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因	
きたうちいせき 北内遺跡	香川県綾歌 郡綾歌町栗 熊東	37384		34° 13' 55"	133° 53' 23"	1,202	国道32号 バイパス	
いけしたいせき 池下遺跡	香川県綾歌 郡綾歌町栗 熊東	37384		34° 13' 53"	133° 53' 18"	5,125	国道32号 バイパス	
まんのう 満濃バイバ ス予備調査	香川県仲多 度郡満濃町 羽間 香川県綾歌 郡綾歌町	37384			1999.06.01 1999.06.30	417	国道32号 満濃バイ パス	
こつかいせき 小塚遺跡	香川県仲多 度郡多度津 町葛原	37404		34° 14' 56"	133° 46' 34"	1999.04.01 1999.05.31	820	国道11号 坂丸バイ パス
取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
北内遺跡	集落	弥生時代 (前期)	土器溜まり、自然河川		縄文土器、弥生土器			
池下遺跡	集落	縄文時代 後期～中世	掘建柱建物、井戸、溝状 遺構、土壤墓		縄文土器、土師器、 須恵器、石鏃			
満濃バイバ ス予備調査	集落	弥生時代	竪穴住居、土坑、柱穴、 土壤墓、自然河川		弥生土器			
小塚遺跡	集落	弥生時代	溝状遺構、掘建柱建物 土坑、柱穴		弥生土器、土師器、 磁器	条界線に伴 う溝状遺構		

国道バイパス建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査概報

平成11年度

北内遺跡

池下遺跡

満濃バイパス予備調査

小塙遺跡

平成12年3月31日

編集 〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001-4  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター

発行 香川県埋蔵文化財研究会

印刷 株式会社 中央印刷所

本書は版権者の了承を得て埋蔵文化財研究会で発行したものである。